
ソウル・オブ・カラース

白河黒船

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソウル・オブ・カラース

【Nコード】

N8753Z

【作者名】

白河黒船

【あらすじ】

MMORPG『ソウル・オブ・カラース』の世界へ突如として囚われてしまった、総勢10001人のプレイヤーたち。ゲームと現実とが奇妙にまじりあったかのように不可解な世界の中で、巻き込まれた中の一人であるアイリは、リンと名乗る少女に危ないところを助けられる。どこかで見覚えのあるような少女の正体を知る間もなく、アイリは過酷な世界で生きていく方法を模索していくのだった――。

01『エンター・ザ・ゲーム』（前書き）

この物語はフィクションです。

実際の人物、事件、団体等とは一切関係ありません。

01『エンター・ザ・ゲーム』

草原にいた。

地平線までを見渡せる、広大な平地だ。背の低い雑草が大地を彩るように芽吹き、気持ちのいい風が躍るように身体を通りすぎていく。

そんな草原の中を、ひとりの人間が、全速力で疾走していた。

誰が？

——俺が。

一歩足を進めるたび、腰に提げられた短刀ナイフがベルトの金属部にぶつかり、擦れるこすような音を出す。

一定のリズムで響くそれと呼応するように、くすんだ灰色の外套が風に揺れた。

まるでファンタジー小説の魔術師が着込んでいるローブのように、寂れた長い布の衣装。

今現在の、俺の格好がそれだった。

——何この服？

知るか、コスプレとかだろ。

遮蔽物のない草原には、爽やかで心地のいい微風が静かに流れていて、本来ならきつと気持ちのいい風景と思えただろう。

けれど今の俺には、呑気にピクニック気分を堪能する余裕などない。

わからないことだらけだった。

そもそもここはどこなのか。なぜ俺はこんな場所にいるのか。そんなことすら知り得ぬまま、ただただ走り続けていた。

走り始めて何分経っただろうか。感覚の上では随分走った気がするが、実際は一分どころか、三十秒も経過したか怪しい。

だいたい俺は全力疾走なんて多分、十秒程度しか保たない。はずだ。

年々低下傾向にあるはずの、俺の体力。これほど信用ならないものもない。

「……けど、その割には……っ」

身体が軽い。

羽のように身軽な筋肉。どこまでも走り続けられそうなほど、俺の全身は力に満ち満ちていた。

意外な自分の体力に驚きながら、思う。

——だとしても、どうして走らなければならないんだ、と。

答えるだけなら簡単だ。

追われているから。現在進行形で追走されていること以外に理由などない。

何に？

——化物に。

「……」

そう——バケモノだ。あるいはモンスターと呼ぶべきか。

俺は今、二体のモンスターに追われていた。

だから走っていた。否、逃げていた。全速力で逃走していた。

「……何でだよ……っ！」

背後に意識をやりながら、俺は嘆くように喉を搾る。

数メートル後ろを追いついてくるモンスター。その見てくれは、

言うなれば、カマキリに近い姿だった。

ただしデカイ。信じがたいほどの巨体だ。体長は、俺の身長を超えるほどに大きい。それだけで既にあり得ない。カマキリ？　これ本当にカマキリか？　こんな生物、俺は知らん。

何より極めつけに最悪なのは、鋭利な輝きを発する二対の鎌だった。

なにせ光っている。銀色に光り輝いている。明らかに金属だった。そんな生物がいてたまるか。

はつきりと言おう。

——怖すぎる。

その姿を見た瞬間に悟った。

……これは、ヤバイ。

と。

俺は、ほとんど反射で逃げ出した。

背後から聞こえた物音で、カマキリ共が追ってきたことも同時に悟る。

それ以来、止まることもできずに駆け続けた。

どうしてこうなった？

——んなこと、わかんねーよ。

そもそも、なぜこんな場所にいるのかもわからないのに。気づいたらここにいて、気づいたと思ったたらバケモノカマキリに追われていた。もうわけがわからない。実際数十秒前までの俺は、半ばパニック状態だった。

しかし人間、その精神構造は存外に凶太いものだったりするのだろう。

ひたすらに走り続けている内、俺は徐々に冷静さを取り戻しつつあった。

「……………」

回り始めた脳を駆使し、俺は自身の状態を確認する。

身体に疲れはない。まだ走っていられる。追ってくるカマキリに對しても、少なくとも速度では勝っていた。追いつかれる心配は、今のところ、ない。

それをいいことに、俺はいくつかの疑問を解決しようと頭を働かせた。

——まず問一。

ここは、どこなのか。

結論を言おう。

わからない。

辺りは一面、草ときどき木、といった感じの様相だ。場所を示す手掛かりになりそうなものは何もない。まさに《草原》。それ以外の何物でもない。

……そもそもこの場所は日本のどこかなのだろうか？

俺には日本どころか、世界中の何処を探しても、こんな風景に目に来ると思えないのだが。

考えたところで、答は出せそうになかった。

よって保留だ。

結論の出せぬ思索に、いつまでも囚われるわけにはいかない。

——続いて問二。

なぜ、見も知らぬ草原に俺はいるのか。

これもわからない。先と同様、考えて解を出せる問題でもないと

思う。

最後の記憶は、自宅でネットゲームに興じていたときのものだ。それがある瞬間でぷつりと途絶え、気がついたらば草原くさげにいた。誘拐とか、拉致とか、少なくともそういういった類の何かに巻き込まれたという感じではないと思う。かといって、では何なのかと問われては困るのだが。

考えても埒が明かなそうだ。

——では、問三だ。

俺は、これからどうすればいいのか。

そう——問題はそこだ。

結局のところ、諸々の疑問は全て、そこに集約する。

「……………」

実は先程から、俺は頭の中にある仮説を思い描いていた。

突飛で、壮大で、妄想みたいなひとつの仮説。けれど俺は、それ以外の説明を見出すことができそうになかった。

仮説を構成する材料になった要素は三つだ。

まず第一。俺の服装が、いつの間にか変わってしまったこと。

第二に、俺を（多分）捕食しようとしている、謎のモンスターの存在。

そして第三に、俺の体力が異様に高いということだ。

「……もしそうなら」

俺の考えが正しいのであれば。

「俺は——このカマキリを倒くたせる」

はずだ、と、思う。

というよりも、倒さなければ追いつかれてしまうだろう。
そして追いつかれてしまつては――

「――ジ・エンドだ」

そうでなくとも、カマキリには^{はね}翅があるのだから。

脚での競走ならばともかく、

「……おいおい」

背後から羽ばたきの音が聞こえた。

ダメだ、飛行されたら確実に追いつかれてしまうだろう。

もう、賭けに出る以外に生きる道はない。

ならば――

「……っ」

俺は一秒だけ逡巡し、

「――!!」

意を決して立ち止り、振り返った。

同時に腰のナイフを抜き放ち、右手で逆手に構える。

二体の巨大カマキリと――目があった。

「……!」

瞬間、俺は確信した。

身体の芯から――魂の底から――力が湧いてくるのを自覚する。

――勝てる。

俺はナイフの柄を強く握り込んだ。

こんな肉厚の刃物を振り回した経験なんて当然ない。けれどこの短刀は、まるで十年来の愛刀だともいうように手に馴染む気がした。

力を貸してくれよ、と。

掌から繋がる短刀に、俺は心からの挨拶を送る。
あいぼう

目を見開き、前を見据えた。

恐怖心は否定できない。俺のナイフなど、目の前のカマキリどもの鎌に比べれば酷くちやっつい刃物でしかなかった。

人一人の首くらい、簡単に刎ねてしまえそうな鋭い鎌。それはまさしく、死神の鎌に等しいだろう。

けれど、同時に。

俺は言い知れない昂揚を、心のどこかで感じていた。
妄想、幻覚、あるいは錯乱――。

そうだとしても知ったことか。

ならば、後はそれに、それだけに身を任せればいい。

脳内麻薬、万歳だ！

「――行くぜっ！」

心臓の奥底に貼りついた恐怖を、その一声で振り払う。

そして、

「先手必勝――！」

跳び込んだ。

まずは向かって右の敵。
カマキリ

狙うは首。反撃を封じるには、一撃で倒すのが一番いい。

爆ぜるように飛び出した俺は、一瞬でカマキリの背後へと回った。
そして振るう。

首の付け根に向かってナイフを振りかぶり――、

金属音が響いた。

反応された――！？

狙われたカマキリが、振り返るように左の鎌を振るっていた。
防がれる。

二種の刃が、火花を散らし交錯した。
それを、

「お——らアッ！」

俺は強引に力で押し返す。

腕力は、今の俺の方が勝っていた。毀たれた鎌を見る限りでは、
刃の鋭さもだ。

スペックは上。ならば敗北するはずがない。

よろめき蹈躡を踏むカマキリ。俺はその隙だらけの胸の中心に、

「——貫った！」

一撃。

胸の中心を穿つようにナイフを突き刺した。

パキン、

というガラスの割れるような音が響く。

それは、命がゼロに帰した音だ。

カマキリの身体が崩れ、淡い緑色をした光に粒子となって、空気
の中へ融けていく。

その向こう側から、

「——！！！」

猛るように、憤るように。

もう一体が鎌を振りかぶっていた。

「……！」

上から下へ、外から内へ。バツ印を刻むように振るわれる二閃。
描かれる十字^{クロス}。

退避は間に合わず、防御は不可能。確実に命を奪いに来る鎌の薙ぎを、

「―――らあっ!!」

俺は、上へと跳躍することで対応した。

十字が到達するよりも早く、鎌の軌道より上に行く。

身体は横に倒れ、錐揉みするように回転しながら、

「――、っ!」

重力に乗って――縦に断つ。

拳を地面に叩きつけるように、俺はナイフをまっすぐに振るった。一閃、敵の身体を両断する。

パキン――、

と、また音が聞こえた。

カマキリが光となり、ふっ、と空気の中へと消えていく。

音が、消えた。

色もまた――同時に、消失する。

それと同時。

俺は、地面に膝をついた。

「勝っ、……たっ!」

のだと、思う。

思うのだけれど、それを意識するより前に、忘れていた恐怖心が胸にぶり返してきていた。

「うわあ……びびったあ……! 超怖かった……!!」

ふう――、と荒れた息を整える。

勝てるという確信はあった。でなければ戦わない。戦えない。

だが戦わなければいずれ追いつかれ、あの鎌の餌食となっていただろう。

結局のところ、選択肢はひとつだった。

「……とはいえ」

それを理解していたからとはいえ、ならば戦えるかと問われれば、それはまた別の話になる。

そもそも、あんな見るからに怪物じみた怪物を相手にして、まともに戦えるわけがないだろう。だって怖すぎる。俺は殴り合いの喧嘩をした経験すら、片手の指で足りる数なのだから。

「……、……、っ」

俺は息を整えると、ゆっくり立ち上がり、近くに見えた灌木の根元まで向かった。

そこで改めて腰を下ろし、考える。

先程考えていた疑問、その問一。それには答えを出せそうな気がした。

恐らく――

「ここ――ゲームの中の世界だ」

呟く。

そうとしか考えられなかった。

まったくマンガかアニメの如きシチュエーションだ。とても現実のものだとは考えられない。

けれど同時に夢だとも思えない。

頬に感じる風が、掌で触れる草が、額を流れる汗が。そして何よりも、この肌で感じた強い恐怖の感情が――。

全て、紛うことのないリアルさを持っていた。

「まあ、夢なら夢で、そのほうがいいんだけど……」

よもやそんな展開オチでもあるまい。

夢なら既に醒めているだろう。

これは、紛うことなき現実だ。

「……」

なぜ、そんな発想に至ったのか。

初めに違和感を覚えたのは服装だった。

記憶の限りでは、俺はヴィンテージでもないのに色の薄れたジーパンと、一枚千円のださい白のTシャツを着ていたはずだ。

仮にそれが記憶違いだったでしょう。

それでも絶対に自分の服では有り得ないと言い切れる格好を、今の俺はしているのだった。

——どんな格好か。

皮の鎧……とでも言えはいいのだろうか。RPGのキャラクターが装備していそうな、胸当てのついた茶色の防具(?)に、くすんだ灰色の布のズボン、上からそれと近い色合いのローブだかマントだか……、そんな感じの格好だ。

なんというか、いかにもファンタジーの世界に出てきそうな見た目になっている。

世間的には、それを指して“コスプレ”と言うのだろうか……生憎と、俺にコスプレの趣味はない。そもそもこんな服は所持すらしていないだろう。

それでも俺は今、自分がしている服装——あるいは装備と言うべきか——に覚えがあった。

この場所へ来る前の最後の記憶。

自室でプレイしていた、とあるオンラインゲーム。

——『ソウル・オブ・カラーズ』。

通称をSOCというこのゲームは、いわゆるMMORPG——多人数同時参加型オンラインゲームだ。その奥深いゲーム性、特に自由度の高い——高すぎるとさえ言えるような——キャラクター成長

の幅を最大の特徴としている。さらに広大かつ詳細な世界観と美麗なグラフィックも相まって、瞬く間に年齢性別を問わない人気を獲得した、と言われている。

そう――、

今の俺の姿は、このゲームで俺が育てたキャラクターと、ほとんど同じだったというわけだ。俺はそれに気づいていた。

無論、自分が着ている以上その全体を見ることはできないが、それでもはつきりとわかった。

これは、ゲームの中の自分の姿だ。

そして、それに気がついたことで、連鎖的にもうひとつ別の事実にも俺は思い至っている。

先程のカマキリ型モンスターにも、俺は見覚えがあった、ということにだ。

S O Cは画質のリアルさも売りのひとつであるが、それでもゲームと現実には差異がある。さすがに実写そのものとまでは言えない。それゆえに見落としていたのが……。

先程のカマキリ。

アレとよく似た雑魚モンスターが、S O Cにも存在していた。

考える度に冷静さが増し、俺は連鎖的に様々なことを悟っていた。

まずは周囲の草原。S O Cにも、確かにそのまま、《草原》というフィールドが存在する。

そしてより重要に思えたのは、全力疾走を続けても自分が疲れない理由だった。

考えてみれば、体力だけでなく、速度自体も普段の自分より幾分上がっている気がした。まるで自分の身体ではないようだ。肉体が思い通りに動く――その言葉の意味を、俺は生まれて初めて知った

気分だった。

——そして。

決定的だったのは、ステータスの閲覧ができたことだ。

よくよく意識を凝らしてみると、頭の中に、自分のステータスやHPゲージが見えてきたのだ。

実際に視界に映る訳ではない。それで『見える』とは妙な表現だが、それでも俺には、他に表現のしようがない。

とにかく『見える』。

N a m e .. アイリ
L e v e l .. 100
C o l o r .. 灰【Gray】

とか。そんな情報を、脳裏で閲覧することができた。

それで、思う。

恐らく今の自分の体には、ゲームのステータスが反映されているのではないかと。それで身体能力が上昇しているのだと。

俺はそう、確信するに至った。

ゲームの中での自分なら、あのモンスターに勝てるはずだ。あの
カマキリ型モンスターのレベルは、記憶の中では高くても30ちよ
っとだったはず。自分の——自分がゲームで育てたキャラクターの
レベルならば、ステータスのにまず間違いなく負けない。

そう思って振り返り、カマキリの姿を見てみれば、頭の中に敵の
HPやレベルが見えてきた。

それが、最後の後押しだった。

倒せる。

そう確信した。

……気づけば俺は、何かに突き動かされるようにナイフを抜いていた。

この程度の当て推量に、自分の命まで懸けるなんてあり得ない。普段の自分ならそう思っただろう。

けれど、このときの俺にそんな考えはなかった。ただただ確信していた。

俺はこのカマキリを倒せると。

なぜかそう、信じきってしまったていた。

「俺って、そんなに好戦的だったかなあ……」

わからないが、まあ、実際勝ったのだから良しとしよう。……うん。

それよりも今考えるべきは、

「俺、これからどうしようかなあ……」

と、いうコトなのだから。

01『エンター・ザ・ゲーム』（後書き）

※用語集※

○the Soul of Colors【ゲームタイトル】

色、という概念を主軸に添えた人気MMORPG。略称はSOC。和・洋・中ないまぜにしたような世界観は賛否両論だが、その節操のなさが実現した美麗なグラフィックや街の外観が、若年層や女性客に意外と受けた、とか何とか。

○スラッシュマンテイス【モンスター】

カマキリを模した巨大な虫系モンスター。レベルは30〜50ほど。

両手のカマは金属であり、プレイヤーの武器とも切り結べるほどの硬度を持つ。また巨体の割に素早く、また背中の翅を使って短時間の飛行も可能。

入手できる素材は《鉄のカマ》、《虫の翅》など。

02 『現状確認』（前書き）

あとがきに載せる用語集はおまけなので、読む必要は基本的にあ
りません。

02『現状確認』

しばしの休息を経た俺は、広大な草原の中を歩き始めていた。

辺りは一面、短い草の茂った平地だ。ところどころ背の低い木や土がむき出しになった地面も見つけられるが、基本的にはどの方角も同じような景色しか広がっていない。

それは確かに、俺がSOCで見慣れた《草原》の光景だった。

ただし、違いがないわけではない。たとえばゲームのフィールドには、これ以上は進めない、という見えない壁のような境界があった。それがなければ無限にフィールドが続いてしまうため、ゲームとして考えるならば当然の要素なのだが、その限界地点が、今は、ない。

驚くほど広い大自然。道と呼べる道が獣道すらなく、どちらへ進めば街へ——この場合の『街』とは、ゲームでいうプレイヤータウンのことだが——着くのか、周囲の風景からは判断できない。

が、

「^{マップ}地図が見られたのはラッキーだった……」

先の休憩時間に確認した諸々。

たとえば、ゲーム時代には見られた、いわゆるステータス画面。念じれば頭の中で見ることが可能なそれは、ゲームのときとほとんど変わらない感覚で利用可能だった。敵や自分のHPなどを確認するときと変わらない。視覚ではなく、感覚で情報を閲覧することができる。同様に地図や方位、ついでに時間なんかも視界の隅で確認可能だ。

「なんというか、便利だよなあ……」

とは、思った。

妙にご都合主義っぽくて、なんだか少し醒めるような気もする。

「……意外と冷静だな、俺」

ゲームの中に入ってしまった、だなんて。そんな空想を、ファンタジーこうも簡単に受け入れられるとは、我ながら存外に図太いというか何というか。

「もしくは、何も考えてないだけなのかね」

だが少なくとも、俺は今、自分がネットゲームの中に――SOCの中に入り込んでしまっている、という部分を疑う考えはなくしていた。

なにせ一致する要素が多すぎる。その前提を無視するほうが、むしろ現実を見ていないと思う。

「……まあ、どうであれ、とりあえずは人間を見つけないとな」
歩きながら俺は考える。

探せば俺と同じ境遇の人間が、恐らくどこかにはいるはずだ。なんていうか、そう、このテの物語の王道というか、パターンとしてはそうだろう。

あるいは俺だけが巻き込まれたのかもしれないが、その思考は恐怖を招く。少なくとも今は、他に人間がいると考えて行動したかった。

俺とて男だ。ガキの頃に憧れた物語の主人公のような境遇に、心が躍らないと言えは嘘になる。

けれど同時に、もう少年とは呼べないくらいには歳を重ねた俺にとって、“冒険”という言葉の輝きは、幼いときに比べて随分と減少してしまった。

現実、と。皆がそう呼ぶ世界のことを、俺は考えないわけにはいかない。

だからこそ俺は、まず人が集まりそうな街を目指した。

このSOCというゲームには、まともなプレイヤータウンは、な

んと一カ所しかない。MMORPGにはあるまじき設定だが、そうなのだから仕方がない。

プレイヤーはその“街”から様々なフィールドに繰り出して行き、冒険が終わればまた“街”へと戻ってくる。フィールド自体は出現する敵モンスターの強さ（レベル）によっていくつかの層と、更に小さい区分である区に分かれていたのだが、街へ瞬間移動できる《転移結晶》という魔法の石みたいなモノが、どの層にも設置してあるはずだ。

マップによれば、現在位置は《草原フィールド・第三ゾーン・第七エリア》ということになる。

ゲームでは遥か昔に踏破した低レベルフィールドだが、それ故にマッピングも済んでいるので、転移結晶の位置は把握している。

現在位置も、結晶の位置も知らせてくれる便利すぎる脳内マップのナビゲーションに従って、俺は草原をひた歩いた。

「それにしても、エリアのひとつひとつが、なんかゲームのときより広くなってる気がする……」

画面の中を俯瞰するのと、自身の目で見回すことによる感覚の差だろうか。それとも実際に広さが変わっているのか。

ともかく俺は、広い草原を歩き続けた。

時折、先程のカマキリや、加えて毒々しい体色のデカイヘビっぽいヤツとか、身のよだつような口臭を撒き散らす醜悪な顔のオオカミっぽいヤツとか……、なんだか妙なトラウマを俺に植えつけようとしているかの如きモンスターたちが襲いかかってきたものの、どれも簡単に撃退できた。

カマキリやヘビやオオカミに見えるけれど、でも確実に違う何か。現実世界には絶対に存在していないだろうモンスター。

抵抗なく攻撃できるのは、それが理由なのかもしれない。

遭遇率はそう高くない。これは、あまりにもレベル差があるとモ

ンスターが現れにくくなるという、S O Cのゲーム的な仕様ゆえだと思われる。

また、あまり威力の高い方ではない俺のナイフだが、恐らくレベル差のためだろう、どのモンスターも大抵は一撃でHPをゼロにできた。

それに、単純な身体能力だけじゃない。体力や動体視力、反射神経まで向上している。

もはや負ける気がしなかった。

そんな諸々が、俺の中の危機感をどんどん減少させていく。

「こういうのを、ゲーム脳って言うのかね……」

なんて、そんなことを独りごちる余裕まで生まれてきた。

まあ、テレビで識者とやらが語るような、根拠のない評論に興味はないが。

ともあれ余裕が出てくると、今度はいろいろなことを試してみたくなるのがゲーム脳（笑）^{かっこわるい}というものだ。

たとえば《^{スキル}技》。

大方のM M O R P Gよろしく、このS O Cでもいろいろなワザを習得していくことができる。

習得したスキルは、基本的にS P（ソウルポイント）と呼ばれる数値（まあ要するに、MPみたいなモノだ）を消費することで使用できる。

たとえば、

「――《灰空牙》！」

という技は、武器の先端からカマイタチのような衝撃波を発射する遠距離技だ。

大した威力のあるスキルではないが、それでもこのフィールドのモンスターであれば、遠巻きから安全に狩ることができる。

……いや、別に技名を叫ぶ必要はないのだが、そこは気分だ。少し恥ずかしいというか、傍目にはイタい感じではあるけれど、周り

に誰もいないのだから気にすることはない。気にしない。

それに――、

振ったナイフの先から、カッターのような衝撃波が飛び出したときの興奮は、言葉じゃ表せないものがあつた。

魔法を使って攻撃。

男の子永遠の憧れと言っているだろう。これには感動せざるを得ないと思う。技名だって叫びたくなるというものだ。

まあ、S O Cの設定的には、このスキルは“魔法”というわけではないのだが、結果的には似たようなものだろう。その程度で褪せる感動ではない。

俺のテンションは一気に上昇した。

上がったテンションに任せて次に試したのが、果たしてモンスターの攻撃を受けたらどうなるのか、ということだ。

それまでは、モンスターからの攻撃は全て回避していた。だが、いつまでもそれが出来るとは限らない。このS O Cには、ときどきゾーンのレベル帯を超越した強さのレアモンスターが、ぽつと湧いて出ることもあるのだから。いざというときのことは考えておく必要があるだろう。

だが正直言って、これは熱にでも浮かされていないと試す気になれない。

……というか。

正直、最初の一戦は、自分でもどうかしていたように思う。頭がオーバーヒートしていた。

よくもあんなおそろしいモンスターに向かって行く気になったものだ、我ながら。

さておき、被ダメージの調査だ。

恐らくH Pが減るだけで、きっと俺自身が傷ついたりとかはしな

いと思うのだ。というかそうであってほしい頼むから。

だって怖えし。

少なくとも、あのカマキリの鎌で試す気には到底ならない。

ていうか、いくらモンスターとはいえ、もうちょっと可愛げのある見た目であれよ、なんて思う。

……まあもつとも、あまり可愛げがあり過ぎると、今度は攻撃がしづらくなるのだが。

実際、歩いている内に遭遇したウサギに似たモンスターには、なんとなく抵抗があって攻撃できなかった。倒しても——殺しても——その死骸は残らず、ファンタジーな感じで光となって消え去るだけなのだが、やはりゲームとは違い、自分の手で凶器を振るわなければならぬという事実は、少なくとも心理的抵抗を生む。

幸いそのウサギ（のような何か）は非アクティブ型の——能動的にプレイヤーを襲ってこないタイプのモンスターだったので、何もせずに通り過ぎたが。

俺はモンスターの中でも、比較的安全（？）のようなオオカミ型のモンスターを実験の対象にした。

だが《噛みつき》攻撃はヴィジュアル的に怖い。鋭いのは何かイヤだ。ここは、距離が離れると使ってくる《突進》攻撃を受けてみようと思う。

そう考え、俺はオオカミ（的な何か）と相対した。

やはり試すには、無抵抗で攻撃を受けるのが一番ベターだろう。

……これだけのレベル差ならば問題ない、大したダメージにはならない。

そう自分に言い聞かせる。

勢いよく突っ込んで来るモンスター。

ヒトを跳ね飛ばさんとばかりの速度で、まともに受けたら骨折は必至だろう。

そんな攻撃に対し、俺は「バッチ来い！」とばかりに両手を広げ、

「――あ、やっぱ怖えっ！」

結局、腕を使って防御の構えを取りつつ、敵の攻撃を受けた。

ずしりと、弱く鈍い、しかし重みのある痛みが腕に響いた。だが撥ね飛ばされるほどではない。僅かばかり押されてノックバックしたものの、そこで耐え切った。

――痛みは、ある。

でも大したモノじゃない。

脳の片隅に知覚できる自分のHPが、本当に少しだけ、ちびっと減少するのがわかった。

それを見てから、俺はカウンターを行うように、敵の眉間へとナイフを突き立てる。

肉を抉るような感触じゃない。本当にゲーム的な、紙風船でも突いているかのような手応えのなさ。

それでも効果があるのは事実だ。一撃でHPを消し飛ばされたモンスターが、光の粒子となって霧散する。

呆気ない終わり方だった。

まだ数体残っていたモンスターを、今度は素早く倒し切り、俺は自身の身体を確認する。

攻撃を受けた両の腕には、少しばかりの痺れを感じていた。

「……多少の痛みはある、か」

それがわかったただけでも収穫だろう。

さすがに――

——HPがゼロになったらどうなるのか。

という、疑問。そこまでを試す気にはなれなかった。

ゲームでは街の神殿で復活できたが……

「こういう展開の王道を考えると、さすがに悪い想像ができるよな……」

というか、悪い想像しかできない。

——念のため。

俺は脳内に見えるアイテム欄から、回復のための薬を取り出して使用した。

ダメージ量と回復量の比率を考えると、かなり勿体ない使い方ではあるが、ケチる気にはならなかった。

……これで、アイテムが使えることまで証明された訳だ。

自分の中のどこかにある冷静な部分が、そんなことを考えていた。使うときだけ手の中に現れるとは、本当に、都合のよすぎる便利さだとは思っけれど。

……とまあ、そんな感じで。

俺は思いつく限りのことを、試し試しに歩いた。

時間にしたら……それでも三十分くらいか。結構な距離を進んだ気はするが、肉体的な疲労はまるで感じていない。

便利なものだ、と。

現状へ既に適応した思考が、他人事のようにそんなことを思う。

「……………」

それにしても。

なんというか、いまいちゲームの中だとは思いつらい場所だった。デジタルな感覚はまるでなく、地球のどこかだとはあまり思えない

が、かといってVRの世界だとも思えない。

ヴァーチャルリアリティ

嫌悪感を喚起するモンスターたちとは違い、周囲の景色は驚くほど美しいものだった。少なくとも、僕が今までの人生で眺めてきた様々な光景の中では一番だろう。まあ、大して旅行をした経験もなし。そもそも心を強く打つような絶景など、テレビの向こう側の話でしかなかったが。

それを抜きにしても、眼前に広がる草原には息を吞まされる。

360度どこを見渡しても、地平線まで続く新緑の絨毯。ゲームの中だと思わせるような、ヴァーチャルな感覚は微塵もない。吹き抜ける薫風も、微かに漂う草の香りも、全てが現実のそれよりリアルにすら感じられた。

「なんか、気分のいい場所だよなあ……」

どちらかといえばインドア派の俺でさえ、弁当持ってピクニックにでも来たいと思えるほどだ。もっとも、モンスターさえ出なければ、だが。

それは、ゲーム時代には思い浮かべることすらなかった思考だ。いくら最近のゲームがハイクオリティだとはいえ、さすがに自分の眼で目の当たりにするのでは差がありすぎる。

まあ、それ以前に、本来的に“戦闘”という行為が活動の主軸になるゲームにおいて、暢気にピクニックして遊ぼうなどと考えること自体まずないが。そんな暇があったら狩りをしている。

「――」

思う。

やはり、『ゲームの中に入り込んだ』というよりは、そう、『異世界に飛ばされた』とでも考える方が、感覚的にはしっくりくる。

「いや、主観的にはどっちも変わらないんだけど」

むしろ、脳内に見える地図マップやステータス画面なんかは、ひどくゲーム的であるけれど。

それでも。

まるでファンタジー小説の主人公にでもなった気分だ。得た能力^{ちから}は、伝説の聖剣の代わりに、ゲームのスキルだったという感じで。

……もつとも、実際にはそんな悠長な妄想に浸っている場合では決してないのだろうが。

「まあ、これはこれで、浮かれるなって方が無理なシチュエーションだと思っただよなあ……」

これから先に、ファンタジーな冒険が待ち受けているのではないか。

なんて、我ながら子供じみた想いが胸を占めている。

——果たして、この状況。

まともな人間なら、絶望するのだろうか。

それとも、誰しも存外、歓迎するのだろうか。

どちらも正しい気がするし、どちらもズレているような気がした。

「……ま」

とりあえず。

大学の出席やバイトのシフトについては……、うん。考えないでおこうと思うけれど。

いや本当、どうしようね。

「——と」

している内に、ようやく目的地が近づいてきた。

少し先に、淡い緑色に輝く、直径50センチはあろうかという大きな水晶球が見える。

ゲーム内での名称を言えば、^{ゲートクリスタル}《転移結晶》。たとえ未プレイでも、

大方の人は名前で察せられるだろう単純なネーミング。要するに、ワープが出来る魔法の石、といったところだ。

プレイヤータウンへは、各エリアに点在する、この転移結晶を使って帰還する。

逆を言えば、この石を使わなければ、街へは戻れない訳だが。

「……、ん？」

そのときだった。

転移結晶のすぐ近くに、俺はふたつの人影を目に捉えた。

それは、

「……！」

人影。

そう、人影である。

俺は初めて、自分以外のプレイヤーを見つけたのだ。

——仲間がいた！

と、咄嗟に思った。

カマギリオオカミ

先の虫や獣のようなモンスターではない。無論、亜人タイプのモ

ンスターとも違う。

それは確かに、自分と同じ人間のプレイヤーだった。

少なくとも、そう、見えた。

02『現状確認』（後書き）

※用語集※

○ステージ【ステージ】

SOCにおける基本的な戦闘区域。要するにモンスターが出現する所。

全部で10のフィールドがあり、それが幾つかのゾーンに区分され、さらにエリアで細かく分けられている。

フィールド＞ゾーン＞エリア、である。

また、ダンジョン、といった場合は特別に区切られた閉鎖空間を示す。その場合の広さは数エリア〜1ゾーン丸々全て、までまちまちといったところ。特定の場所にぽつんと遺跡があったり、イベントで加えられたりする。

「わかりづれーよ！」と初心者には不評だが、なんだかんだで大抵すぐ慣れる。

○灰空牙【スキル】

灰色属性の遠距離攻撃技。

自身の武器から衝撃波を繰り出すスキル。持ち武器が弓などの遠距離武器の場合は、実質的に死に技と化す。

低コスト、低威力の、いわば牽制技である。

余談だがSOCに遠距離攻撃スキルはかなり少ない。レアである。

○SP【ステータス】

HPと並んでゲージ表示されるステータス。数値を消費することでスキルを発動させる。

まあ、要するにMPですよ。

03『強襲』

そこにいたのは、二人組の男だった。

片方は重めの鎧を着込んだ槍使い、対してもう一人は比較的軽めの装備の片手剣士だ。

「さすがにゲームよりはリアル……ってというか、普通の人間に見えるよなあ」

そういえば、今の自分はどんな顔をしているのだろう。

ゲームアバターの顔なのか、それとも実際の自分の顔なのか。

「ま、それは後で確認するとして……」

俺はもう一度、前方の二人を眺める。

「色は、……黄色と赤かな。わからないけど」

遠目に見ながら、なんとなくで呟いた。

《色》、とはSOCにおける、いわゆる職業^{ジョブ}のことだ。

大方のMMORPGと同じく、SOCでもゲーム開始時のキャラクターメイキングで、いくつかある選択肢の中から好みの職業……ならぬ色業を決めることになる。

色は全十色。それぞれの差は、基礎ステータスと覚えられる技^{スキル}の幅だ。

もつとも獲得したポイントを振り分けることで、ある程度は任意のステータス成長が可能だし、武器や防具の選択も色にかかわらず自由だ。同色だからといって、同一の戦い方をするとは限らない。もちろん幾つかのパターンというか、育成の定石みたいなモノは存在する。相手がどの色に属するかを見破る楽しみも、SOCでの戦闘における醍醐味のひとつだろう。

ちなみに俺の色は《灰》。他色に比べ圧倒的に多いスキル数と、絶望的に低いステータス平均値が特徴の、なかなかピーキーな色である。まともなのはSPの数値くらいものだ。

器用なので、それでも単体生存能力は高い色である。
ただし器用貧乏なので、パーティで重宝されることがほとんどない。

「……」

さておき。

俺は二人組の男に近づいて行っただ。

俺と同じく、今いきなりこの世界に飛ばされたのか。それとも何かを知っているのか。

どうであれ情報交換くらいのはできるだろうと、そう思った。

「あの、……すみませーん！」

声をかける。

二人の男が、首だけでこちらに向き直った。

ゲームにも一応、マイクを通じて行えるボイスチャットの機能はあったが、さすがにこう、フィールドのど真ん中で突然叫ぶような真似はあまりしない。

そんなところもゲームとは違うよな、などと思いながら、俺は更に言葉を重ねようと口を開き、

「あのーえっと」

そこで言葉に詰まった。

さて、一体何を言ったらいいものか。というか、なんと言ったらいいのだろうか、というか。

自分以外の人間を見つけたことに舞い上がって、不覚にもそれを考えていなかった。

……とりあえず、こちらから質問をさせてもらおうか。

そう思い俺は、

「すみません、ちょっと訊きたいことがあるんですけどー」

と。

そこで初めて、彼らが武器を抜いていることに気がついた。

「……え、」

間拔けな声が――否、間拔けな音が、喉の奥から零れ出た。意味を持たない呼気の塊が、意味もないまま大気へ溶ける。

そして。

その瞬間には既に、男の片方――槍を持った方がこちらへ飛び出て来ていた。

着込んだ鎧の重さを感じさせない、稲妻のように素早い一撃。

気づいたときには、槍の穂先はもう目と鼻の先で。

襲われる意味など何一つ判らないまま俺は、

「――っ!？」

ほとんど反射的に、俺は地面へ倒れ込むように身を捻っていた。

瞬き一つ分だけ遅れて、それまで俺の上半身が存在した空間を刃が通過するのがわかる。

――躲した。

それを理解する。

そして躲したことを理解して初めて、俺は自分が躲さなければならぬような攻撃を受けている、ということに思い至った。

「なっ――」

わけがわからない。

わけがわからないまま、ただ顔面と地面の距離が徐々に近づいていく。

咄嗟の回避で、身体のバランスが崩れてしまっていた。

「――くっ」

腕を使って転倒の衝撃を殺す。

それは、どうしようもない隙だった。

頭のどこかに潜む冷静な自分が叫ぶ。

——追撃が来る！

もはや男の姿を確認している暇はない。俺はそのまま、突いた腕の力だけで強引に、転がるように襲撃者から距離を取った。

一刹那の後、槍の柄が風を切る音が聞こえた気がした。

地面を転がりながら、俺は身体をバネに見立てるように跳ね上げ、無理やり体勢を立て直す。その流れで、腰からナイフを抜き取った。

自分の動きに自分で驚きつつ、起き上がる。

二度目の追撃はない。

突如強襲してきた男は、無感情な、ただ相互の間に開いた距離を測っているだけのような瞳でこちらを見るともなく見ている。

「……いたい」

何が、どうなっているのか。

自分でもわからない。

男が襲ってきた理由もわからないし、何よりそれに自分が対応できた理由が理解できない。自身が持つ奇妙なまでの冷静さが、自分で一番、不気味に思える。

まるで予定調和の劇を演じたような気分だ。

——いや、違うか。

正確には人形劇だ。

自分の身体が、舞台の外から糸で操られているような。そんな気分がした。

「——」

……まあ、構わない。それで助かったのだから。文句も不満もありはしない。

思えば、モンスターと戦っているときから、どこか自分はおかしかった。

身体能力が上がっているだけじゃない。戦う、という行為自体に対する反射や思考が、普段の自分からは考えられないようなレベル

に至っている。

自分が自分でないようで、あまりいい気分とは言えなかった。

「——いや。今はそれどころじゃない、か」

まずは目の前の襲撃者をどうにかしなければならぬ。

「……PK、ね……。つたく、ホントに死んだらどう責任とつてくれんだよ……」

PK。

プレイヤーキラー。

プレイヤーがプレイヤーを殺すこと。

MORPGではそう珍しい概念ではないだろう。SOCでも、場所にはよるが、可能な行為に含まれている。

もつともあまり褒められた行為でないことも事実だが、多様なオンラインゲームのプレイヤーの中には、当然PK行為をプレイの軸に据える者だって存在するわけで。

フィールドでいきなり殺される可能性は、“ゲーム”において、決してゼロではない。

そんな当然のことも、俺の頭からは抜け落ちていたらしい。

「——いきなり襲ってくるとは、なかなかご挨拶だな、オッサン」

油断なくナイフを構えつつ、俺は言った。

口調は半分くらい挑発のつもりで荒くしているが、もう半分は素が出たようなものだ。

さすがに、いきなり刃物を向けられてはいい気分がしない。

「あー……っと、別に争うつもりはなかったんだけどなあ。少しばかり話を聞きたいだけだったんだけど、嫌なら諦めて、街で他の人を捜すよ。——だからそこ、通してくれないかな」

「……」

果たして。

返答は——なかった。

男はまるで感情らしきものを発さず、ただ決められた作業だからとでもいうように槍を構えた。

その肩越しに、相棒らしき男が剣を持って向かって来るのも見えた。

「問答無用かよ……」

呟きながら、しかし違和感を感じる。

その感覚を、果たしてどのように言語化すれば伝わるだろうか。考えている暇はなかった。

先に来たのは槍の方だ。穂先をまっすぐこちらを向け、突撃兵よろしく猛進してくる。

けれど、

「同じ手が二度も効くか——！」

叫び、俺も敢えて前へ走り出した。

単調なその突進を、くぐり抜けるように躲す。長柄の武器は、そのリーチが長所にも弱点にもなり得るのだから。

一気に懷まで潜り込んだ俺は、そのまま相手の勢いすら利用するように、カウンターとしての一撃を相手の胸へと叩き込んだ。

「ぐっ……!!」

だが——硬い。

刃は胸当てに阻まれ、硬質な金属音を打ちならした。

かなりランクの高い鎧らしい。通常攻撃でまともなダメージを与えるのは難しそうだ。

……平気で突進して来れるのは、この防御力があるからか……！
今更ながらに俺は悟る。その間に、

「——っ！」

相手の槍が引き戻されていくのがわかった。——二撃目が来る。

まともな近接では分が悪いだろう。

槍が引き戻されるより早く、俺は腕へと思いつ切り体重を乗せ、相手を押し倒すように力を込めた。体勢を崩すことで槍の動きを止

めようと狙う。

だが相手もさるもの。先までの低レベルなモンスターとは次元が違った。

男は、身を強引に打ち倒そうとする俺の力を、逆らわずに受け流すことでいなす。

押され半身になった男は、それによって回転の力を身体に得ることになる。

——やばい……！

と、思う頃には遅かった。

引き戻された槍が、その終端で再び勢いを獲得し、

「————！！」

突きではなく、薙ぐような払いが、左側から俺の身体に叩きつけられた。

「ず————あ」

咄嗟にナイフでガードするが、速度重視の軽装である俺では防御力が足りない。

俺は右足で、思いつ切り地面を踏み抜いた。

だがそれは、堪えるには足りない力だった。なんとか直撃は免れたものの、恐らく筋力パラメーターでも敗北していたのだろう。俺は押し負け、強く吹き飛ばされる。

HPの数パーセントを削られたことが、脳の片隅で理解できていた。

——だが。

攻撃は、まだ終わっていない。

敵は一人ではないのだから。

「————」

視界の端で剣士の方が、小声で何かを呟いてのが辛うじてわかった。

遠く、遙か間合いの外にいるはずの剣士。その剣の先から、しかし、青白い光がスパークするのが見て取れた。

瞬間、切っ先から何かが飛来する。

生み出された攻撃は衝撃波となり、槍ですら及ばぬ間合いの外から、こちらを正確に狙い撃つ。

——脇腹に直撃した。

「が——、っは」

血を、吐いたと思った。

実際に漏れたのは空気だけ。だが鈍い痛みが臓物を大きく響かせる。衝撃は内臓にまで直に伝わり、肺の奥から一気に空気を押し出していた。

槍に吹き飛ばされていた俺の身体は、衝撃波によって更に軌道を変えられる。俺は受け身すら取れずに背中から地面へと墜落した。

それでも——、

それでも俺は、あえてニヤリと、笑ってみせた。

まるで感情の片鱗を見せない二人の男を、嘲笑うように口角を歪める。

次の瞬間、槍の男の足許から、猛烈な勢いで草が伸び上がり、まるで縄で縛り上げるように男の脚へと絡みつく。

「—————!」

その一瞬、俺は男の顔に、驚きの表情を見た気がした。

だがそれも、激しく成長する蔦の動きに固められていく。

灰属性のスキル——《蔦縛り》。

罫のように設置できるタイプのスキルであり、名前通りに蔦が対

象の身体を絡め取り、短い時間だが移動を阻害することができる、使いどころを見定めればなかなか有用なスキルだ。

……俺とて何も、わざわざ無為に吹き飛ばされたわけではない。槍を避けきれないと理解した瞬間に、罠を残していくぐらいのことはやっておいた。

《火山》なんかの草木が生えにくいフィールドだとはほとんど使えないスキル（SOCのスキルは、総じて結構、フィールドの影響を受ける）ではあるが、ここは《草原》フィールド。使用に支障はない。

そして――、

俺は駆け出した。目指すは剣使い――の先にある街への転移結晶だ。

そう、別に倒す必要はない。というか、いくら襲われたとはいえ、さすがに人間を攻撃するのは気が咎める。ましてHPをゼロにしてしまおうなどとは考えられない。

ならば、要は逃げてしまえばいいのだ。

SOCでは、ある特定の条件を除けば、街の中では一切の攻撃手段が使用不可能になっている。その仕様が今なお適用されている保証などどこにもないが、ここで2対1のまま戦い抜くよりは、街の中へ逃亡するほうが遥かに楽に違いない。

遠距離技を使用した剣士へと距離を詰めていく。

剣を持っていながら、わざわざ遠くからの射撃を選んだのだ。恐らく、近接戦闘の技能はスキルそう高くあるまい。少なくとも、捕縛した槍使いよりは下のはずだ。

ならば逃げ切れる。

俺は成功を確信する。

まっすぐ走りながら、転移結晶への道を塞ぐ剣士を退かそうとなイフを振り上げ、

「――、え」

ふと、背中に強い衝撃を感じた。

脚が止まる。筋肉が弛緩し、全身から力が抜けるようだった。

そのまま俺は、もつれるように膝をついた。目の前には剣士。その姿に向かって、俺はまるで、赦しを請うて頭こゝろを垂れるような格好になってしまう。

――何、が……？

疑問が脳を埋めていく。

目の前の剣士は何もしていない。槍使いの動きも止めている。ならばなぜ――？

疑問のままに、首だけで背後へ振り返ると、

「……そういう、こと、か……！」

痛みに歪む俺の視界に映ったのは。

こちらへ向けて、静かに弓を構えている――三人目の男の姿だった。

03『強襲』（後書き）

※用語集※

○ゲートクリスタル転移結晶【施設】

街の至るところや、ゾーンの途中などに設置されている、水晶球の置かれた台座。触れることによって、設定された場所へ瞬間移動することが出来る。

SOCにおいての利用頻度は、各施設の中でも最多と言えるだろう。

また設置場所の近くのエリアは、待ち伏せを防ぐために戦闘禁止エリアとして指定されている。

その中ではパーティ以外のプレイヤーは不可視に設定され、そもそも発見さえできない。

○葛縛り（つたしぼり）【スキル】

灰属性のスキル。設置型。

地面に向かって種子を植えつけ、それを踏みつけた者を問答無用で捕縛する。

効果範囲も縛る時間も短く、また阻害されるのは移動のみでスキルの使用などに制限はないので使い勝手はよくないが、解く方法が時間経過以外に皆無なのが利点の一つである。

なお緑属性にはほぼ上位互換で、縛ると同時にダメージまで与える《茨縛り》がある。

○草原【フィールド】

緑色に対応した、三番街から行けるステージ。

出現モンスターの多様性と、フィールドの広大さが特徴。

SOCのステージの中では最もクセが少ないフィールドである。

04『凜として』

まずい……、まずいまずいまずい！

俺は焦る。

それは恐らく、この世界に来てから初めて味わった焦燥だった。

目の前には敵。

背後にも敵。

捕えたはずの敵ですら、そろそろ自由になる頃だ。

——どうして気がつかなかった。

いや、それ以前に、いったどこに隠れていたというのか。

三人目の姿などまるで見当たらなかった。こんな平坦な草原に、身を隠せるような場所なんてほとんどないというのに。隠形系ハイディングのスキルでも習得していたのか？ それにしたって、何もない平地で完全に姿を隠すなんてスキルなんて聞いたことが……！

「……、く」

いずれにせよ、とんでもないミスだ。

そう、

文字通り——致命的なまでに。

「——……っ」

HPは3割以上削れている。が、それはまだ半分以上残っているという意味だ。

けれど身体の内自由はほとんど効かない。

……《麻痺》だ。

ゲームに慣れた思考が、頭の片隅で冷静に答えを出す。

背中に受けた矢の攻撃に、麻痺の追加効果を加えていたに違いはない。そのせいか、背中や腹の痛みは弱くなっていた。同時に手足の

感覚も弱い。末端に妙な痺れがある。

一定時間の行動停止、そして以降の敏捷値すばやかさの低下。

SOCに幾つかある状態異常の内、それが、麻痺によるペナルティの内容だ。

この状況では、まさしく致命的と言っている効果だろう。

「……………」

舐めていた、のだろうか。

舞い上がっていたのだろうか。

それは、そうなのだろう。少なくとも否定はできない。

突然ゲームの世界に迷いこんでしまいました。なんて、そんな現
状に、俺は少なからず憧れを抱いていたと思う。

恐怖や不安よりも、好奇や興奮の方が先に立っていた。

それが——悪かったのだろうか。

「————、くそ」

吐き捨てる、というよりは、零れ出るように言葉が漏れた。

それに反応した訳でもないだろうが、目の前の男が剣を振り上げる。

振り下ろす。

「ぐ——っ!？」

刃が肩を撫で斬った。

痛みはさして気にならない。現実には斬られていたら、俺はその時点で痛覚に負けていただろう。だがここでは痛みが弱い。ゼロではないが、耐えられないほどでもない。

ただ自分の肉を抉られる、その吐き気を催すような感触が酷く不快だった。

確かに斬られたというのに、俺の肩からは血も流れてこない。代わりに頭の中にあるHPのゲージがまた目に見えて減少するのが見

えて、なんだか現実感に欠けていた。

HPがなくなったら。もし、死んでしまったら。

俺はいつたい、どうなってしまうのだろうか。

あくまでゲーム的に、街にある神殿へと戻されるのだろうか。

それとも——それで、お終いなのだろうか。

ご都合主義の神様は店仕舞いなのだろうか。

——わからない。

刃が再度、振り上げられる。

あと何度の攻撃に、俺のHPは耐えられるだろうか。なにせステ貧の《灰色》だ。単なる通常攻撃とはいえ、こうもクリティカルに受けていては、もう一、二撃でいい加減ヤバイと思う。

「—————」

光を受け、鋭く輝く刃を、もう何も考えないまま俺は見つめていた。

これで死ぬかもしれないのに。

俺はただ、何も考えずにその剣だけを見続けた。

そして——そのまま。

刃は、振り下ろされなかった。

「え……？」

剣を持つ男のすぐ後ろ。

振り上げた腕を、男の背中側から握って止めている者がいたからだ。

「う——ん、アブないアブない。大丈夫だった？　大丈夫だったよねー？　うん、大丈夫だ！　男の子だもんなっ！！」

酷く場違いな、底抜けに明るい声が鼓膜を揺さぶった。
それは女性の声だった。

「じゃ、今ちやちやと助けるから、待っててねーん」
「は——え？」

耳朶を刺激する軽やかな声は、しかしその印象に反して強く脳を揺さぶった。

眠りかけていた精神を、目を覚ませとばかりに叩き起す声音だ。
そして、

「——やっ」

という軽い掛け声と共に、剣の男が猛烈な勢いで横に吹っ飛んでいた。

女性が、凄まじい速度で蹴り飛ばしたのだ。

「NPCは、動きが単調でいかんねー」

女性が笑って言う。

眩しい笑顔だった。比喩的な表現じゃない。長い髪の毛が、文字通り光を乱反射するように、確かに煌めいて見えたのだ。

冷静にその姿を観察すると、それは同い年くらいの少女だった。皮の防具や金属の鎧に身を包む人間たちの中で、恐ろしく場違いな、ワンピースタイプの洋服を風になびかせている。それがまた、大きく丸い瞳と、彼女の持つ活動的な雰囲気にもまるでそぐっていない。にもかかわらず不自然さは存在せず、彼女はただ健康的な美しさを放っていた。

何色と言っているのか判らない長髪。角度によって光の反射が変わり、一秒前と一秒後ではまったく別の彩りになっている。

どこか幻想的な少女だった。

それは何も、見た目の雰囲気だけが理由ではない。

まるで幼い頃に憧れていたヒーローのように。劇的なタイミングで助けにきてくれた、嘘のような少女。ご都合主義の女神が、微笑んだかのようなタイミングだ。

太陽のような――と表現してもいいほどの笑顔を見せる、少女。彼女は俺の目の前に屈み込むと、トンと俺の肩を軽く叩く。

「ほら、もう動けるでしょ？」

「え――あ、ああ」

「んっ、よし！ ほら立て！ 立つんだじょー。あっははは！！」
促されるままに俺は立ち上がる。

少女はにっこりと、花の咲いたように笑んでいた。

「じゃ、ちよっちソコで待っててね？」

言うなり彼女は走り出し、蹴り飛ばした剣士の方へと矢のように飛んでいった。

「速っ……！！」

とんでもない速度だった。

少女自身が一筋の風であるかのような。運動能力の上だった今に俺にさえ、再現できそうにないほどの速力。

彼女は一瞬で距離を詰めると、その勢いのまま剣士へ強烈な拳を放つ。

「ぱーんちっ！」

どこか間の抜けたような掛け声。

だが共に聞こえたのは、風を斬るような――いや、風が爆ぜるような強烈な響きだった。

速度がそのまま打撃力へと変換された拳の一撃は、先の槍使いと同じ突き技でありながら、しかしそのレベルは段違いの領域に至っていた。

剣士の残っていたHPが、一撃で余さず消し飛ぶ。

信じられない威力だった。

と、そこに矢が飛来する。

先程、俺を奇襲した弓使いによる攻撃だ。

そして同時に、槍使いの方も《蔦縛り》から抜けだし、少女の方へと突進していった。

どちらも俺の方など見向きもしていない。

それは俺と少女、どちらがより脅威なのかを正しく理解していたがゆえのことだろう。

けれど。

彼らの理解が、実のところ正解には到達していなかったと言える。攻撃の続行は、彼らにとって“たったひとつの冴えたやり方”だったとは到底言えない。

……もし、彼女の実力を本当に理解していたのなら。

真に採るべき行動は、一秒でも早く彼女の元から逃げ出すことのはずだったのだから。

弓の連射を、彼女は踊るように避ける。

ほとんど最小の動きで、鼻歌交じりに彼女は軌道を読み切っていた。飛び行く矢など、彼女の舞を盛り立てる小道具の一つでしかない。

矢の次に飛びこんで来たのは、槍を持った男だった。

全体重を乗せた刺突の一撃。

それを彼女は、

「ほっ——」

空中で縦に反回転しながら、ほとんど曲芸さながらに回避する。

そのまま彼女は、身軽にも槍の柄に逆立つように乗ると、

「——はっ！」

倒れるように回転し、男の顔面に強烈な踵落としを叩き込む。

バランスを崩し蹈躡を踏む槍使いを後目に、少女は軽々と地面に着地する。そのまま今度は横向きに身の捻りを加え、

「おりゃあ——！」

尋常じゃない威力と思しき回し蹴りを、男の顔面へと穿ち入れた。槍使いのHPは、それでゼロの値まで一気に消し飛ぶ。

寸前、男が取り落とした槍を拾い上げると、彼女は振りかぶり、弓使い目がけて思いつ切り投擲していた。

直撃。

HPをこっそりと削られた弓使いは、それでもまだ彼女に反撃を試みようとしていたが、

「無駄無駄あ——！」

叫ぶ少女が一気に間合いを詰め、

「オラオラア——！」

目にも止まらぬ速さで拳を一気に叩きこんだ。

「あはははははは——！！！」

テンションがおかしい。明らかにオーバーキルだった。

弓使いは吹き飛ばされ、光の粒子となって霧散する。

——僅か一分にも満たない戦闘だった。

※

凄まじい早業で三人を倒し切った少女が、笑顔で戻ってくる。

数秒前までの、あの尋常じゃない戦闘力を見せた人物と同じ人間とは、到底思えない満面の笑みで。

「大丈夫だったー？」

「あ——ああ。ありがとう。俺は大丈夫だけど……」

正直、いろいろとそれどころではない。
なんなんだ、この少女は。
恐ろしいまでに強かったが……。

「災難だったねえ、いきなりNPC型に遭っちゃうなんて」
と、少女が俺に、そんなことを言った。

「NPC型……？」

聞き覚えのない言葉を、そのまま鸚鵡返しにした俺に、少女が頷いて答える。

「そう、NPC型。プレイヤーと同じ能力を持ってる——でも、モンスターなんだよ」

「モンスター……だって？」

あれが……？

モンスター？

「そんなはず——」

ない、とは言えない、か。

……ならばとそう考えてみると、確かに自分が感じていた違和の
正体も思いつくことができる。

さっきの三人には、どこかモンスターっぽい部分があった気がする。

相対している感じが、なんとなく、それまで戦っていたモンスター
と似たような感覚だったのだ。

モンスターっぽいというのが違うなら、あるいはそう、プログラ
ムっぽいというか。もしくは逆に、人間っぽくないと言ってもいい。
たとえるならば、ロボット。

自己の意志を持たず、命令の通り^{プログラム}にしか行動できない、人形。
先の三人は、つまり、人間ではなかったということらしい。

……それにしても。

彼女は どうして そんなことをしているのだろう。 というか、
いたい誰なんだ。

疑問が表情に出ていたのか、俺の顔を見て彼女は首を傾げた。

「ん、……どしたの？」

「――あー、えっと。君は――」

「んん？ わたし？」

少女がはにかんで言う。

「わたしは《リン》だよ」

「リン……」

それが名前なのだろう。

本名なのか……いや、恐らくはプレイヤーネームのほうだろうか。
割とありそうな名前だけに判断がつかない。

「今、街を目指してるトコだよね？」

リンが訊ねてきた。

「あ……、うん。そうだけど」

「ん。街ならその石からちゃんと跳べるから、その辺は心配しな
くてもいいよ」

「……どうも。それで、君は？ えっと……、街には行かないのか
？」

「私はやることあるから。でも君は、街に行って情報収集してきた
ほうがいいと思うよ」

「……まあ、そのつもりだけど……」

「ん！」

と言って、リンは笑顔を見せた。

その笑顔に。

俺はなぜか――見覚えがあるような気がして。

「――じゃ、私は行くよ」

リンが言う。

「え、……ああ」

脳裏に貼りつくような違和感を振り払い、俺は慌てて首肯した。

「でもまあ、石に触れるまでは見送ってあげるね!」

「……どうも」

そんなことを話しながら、二人で石——転移結晶の前まで向かった。

転移結晶は、見た目には透き通る綺麗な球形の水晶だ。それが地面に固定された燭台のようなものに乗せられている。

結晶はフィールドごとに色が違う。《草原》フィールドの結晶は緑色だ。

「触れれば、それだけで起動するよ」

というリンの言葉に後押しされるように、俺は淡いエメラルドのような結晶に手を触れる。

瞬間、足元から様々な色の光の粒子が浮き上がって、俺の身体を包んでいった。

振り向くと、こちらへ手を振っているリンが見えた。

彼女が口を開く。

「またね————アイリ」

その言葉を最後に、視界は急速に暗転していった。

世界が、ひっくり返る。

04『凍として』（後書き）

※用語集※

○NPC【ゲーム用語】

ノンプレイヤーキャラクターのこと。

この異世界においては、なぜか野生化・モンスター化しているNPCが存在する。

詳細不明。

○麻痺【状態異常】

SOCにおけるステータス異常の一種。

数秒の行動不能と、その後回復まで敏捷値にマイナス補正を受ける。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8753z/>

ソウル・オブ・カラース

2011年12月27日21時53分発行